

The region agriculture leader of Wakayama Prefecture

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

和歌山の 農業士

2025
3
March

地域農業をリードする熱き農業者達

第24号



はじめに

本誌『和歌山の農業士』は、和歌山県の地域農業を牽引するリーダーとして知事に認定された『農業士』が、互いの活動を共有するとともに、関係者の皆様や一般の方々へも、広く積極的に情報発信していくため作成しています。

農業士が長年の農業経験で培った経営観や、これからの農業にかける熱い想いを紹介する内容に加え、各地域で展開される農業改良普及活動や、農業士会としての取り組みなどを内容に盛り込んでいます。

農業に関係する皆様方には、是非、ご一読頂き、地域農業の実情や農業経営の現状等について、ご理解を深めて頂ければ幸いです。

巻頭言

みんなで産地活性化 ～これからの農業経営とみかん作り～

和歌山県農業士会連絡協議会

副会長 松坂進也



有田地方農業士会の松坂進也と申します。柑橘農家を事業継承して10年ほどになります。私が就農した頃は「普通のみかんでは売れない」、「発信をしなければいけない」とある意味で高付加価値論全盛期だったように思います。時は流れて2024年は日本中で農作物が不足し、みかんの大高騰で「みかんの形をしていれば売れる」という状況になっていたように思います。スーパーには普段では2級品であったようなみかんや2L、3Lの大玉のみかんが並んでいます。まさに「作れている人勝ち」ですね。長く続いたデフレが嘘のように金不足から物不足に振り切れた一年でした。私たち農家は労働力や資材、それと太陽の光や熱、水などの自然エネルギーを組み合わせることで農作物を作ります。資材費・人件費は上がってはいますが、それ以上に農作物の価格が上がっているのです。私たちの暮らしは良くなっていく兆しがあるかもしれません。

しかし、業界としてはどうなのでしょう。消費者の財布の中身とみかんへの想いが同じだった場合、みかんの価格が2倍になれば消費量は1/2になってしまいます。それを阻止するにはみかんに対しての想い、つまりみかんを消費することに価値を感じてもらわなければならないと私は考えています。テレビに映る中年女性の消費者は「農作物が高い」と言います。しかし、彼女らが手にもつかばんはブランド物だったりしませんか。若者は「フルーツが高くて買えない」と言いますが一方でスマートフォンは最新の

iPhone16proMAX（159,800円）だったりしませんか。消費者が年間使うお金の配分は消費者の「心のシェア」とほぼイコールです。iPhoneやブランドバッグに完全勝利は無理でしょうが、心のシェアを1%でも2%でも奪わなければいけません。

そんな中で私個人の目標は「平均収量4t/10a、年間作業時間150h/10a」を全園地で達成することです。これを達成するためには基礎管理が非常に重要になりますが、それは私一人ではとても出来ません。そこで作業の標準化が必要になります。つまり、私以外の方が私と同等の仕事が出来るようになる必要があります。そのためにはかなり投資が必要です。誰もがコンテナをヒョイヒョイと運べないので園内道やe-cat（電動ねこ車）が要りますし、初めて畑に入った人が剪定や摘果は出来ないの教育とその教育コストを下げるための作業の簡略化が要ります。選別作業は機械にやらせるかもしれません。そうやって「みんなでみかんを作る」ことで目標を達成しようと思っています。苗木もあるので全園地で目標達成するのは何年後になるかは分かりませんが、達成園地を少しずつ増やしていこうと思います。

巻頭言

うめ栽培の課題解決に向けて

和歌山県果樹試験場うめ研究所

所長 中

一 晃



農業士の皆様におかれましては、平素より地域のリーダーとしてご活躍され、地域農業の振興にご尽力されておられますこと心から敬意を表します。また、うめ研究所の業務に対しましても多大なるご協力を賜り誠にありがとうございます。

近年の農業を取り巻く情勢は大変厳しいものがあります。高齢化や担い手不足、地球温暖化等の異常気象、人口減少に伴う消費の減少など、さまざまな問題が山積する中で、日々、生産者の皆様は対応していかなければならない状況です。

当研究所では、これらの課題に対応できる技術の開発を目指して「高品質安定生産技術の開発」、「新品種の育成」、「病害虫の防除技術開発」を研究の柱として取り組んでいます。

高品質安定生産技術の開発では、省力・安定生産技術としてドローンによる施肥技術の開発、温暖化等環境変化に対応した技術として、開花前の高温が花器に及ぼす影響の解明や水分環境の違いが樹体に及ぼす影響の解明などに取り組んでいます。

新品種の育成においては、収穫労力の分散のための晩生品種、温暖化対応品種、耐病性や環境ストレスに適應した品種等の育成に取り組んでいます。

病害虫の防除技術開発では、クビアカツヤカミキリに関する被害地域の拡大防止技術や防除対策技術の開発を中心として、病虫害の有効な対策の確立を目指して試験研究を進め、さらにうめの病害虫の生態調査による効率的な防除、環境負荷低減技術の開

発による総合防除技術体系の確立に取り組んでいます。

うめ研究所は、今後もうめ産業の振興・発展に寄与すべく生産者や関係者の皆様と共に、様々な課題解決に取り組んでまいります。農業士の皆様方には、今後とも地域のリーダーとして地域農業を牽引されることをご期待申し上げますとともに、当所に対しましてもご意見、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

私の農業

～ピンチに楽農で立ち向かう～

海南市 指導農業士
馬場 伸之



1. はじめに

私は海南市下津町出身で昭和55年3月県農業大学校を卒業と同時に就農しました。就農後は4Hクラブに加入し、青年、地域、指導と各農業士を経験させてもらっています。この間に仲間作りや技術研鑽を行うとともに、役職に就いてお世話をする立場にもなりました。親から経営を引継いだのはみかんの生産過剰による暴落の時でした。希望の見えにくい時もありましたが、楽しい農業を目指して踏ん張りました。それから30年以上の歳月が流れ、今では次世代へ経営のバトンを託そうとしています。

2. 農業経営の特徴

私が農業経営を継承したのは昭和62年で、そのときが私にとって1回目の転換期でした。みかんの生産過剰で暴落が著しく、10キロ段ボールケース入りで1,000円未満でした。そのままでは経営の継続が不可能です。なんとかしなくてはなりません。いろいろと思いあぐねたあげく、中晩柑類が単価よく安定していることに注目しました。一部の園地を清見と紅八朔に転換し、バブル期以降経営の支えとなりました。

2回目の転換期は平成30年です。この年に息子が就農したのですが、9月上旬の台風襲来により暴風で枝折れや倒木などで、みかんの樹が被害を受けました。被害は50本の成木でかさが大きく伐採と片付

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	300 a
清見	50 a
八朔	10 a
その他柑橘	20 a
キウイフルーツ	10 a
○労働力	
家族	4人
臨時雇用 (延べ100日)	



枝吊りしたみかんの若木と私

けが大変で、息子も生産性のない作業の毎日に疲れた様子でした。ただ、一部には希望も見受けられました。樹齢10年程度の若い樹は全く被害を受けていませんでした。このことがきっかけで毎年10a程度の改植を行っています。最近はYN26、きゅうき、丹生系などの和歌山県オリジナル品種への転換を行い、園地の若返りが実現しています。自然現象から大切なことが学べたので、まさに怪我の功名なのかもしれません。30代の頃は同じ志の友や家族と語らいつつながら楽しく農業をしたいという気持ちでしたが、今は身体に無理なく楽な農業をしたいと思うようになりまし。園地改造やスマート農機の導入によって実現するかもしれません。そのためには技術や制度の最新情報を得て、導入の可否を経営と照らし合わせながら考えていきたいと思ひます。



みかん選別作業

3. 今後の経営方針

令和6年産のみかんは平均キロ単価が300円を超えるもので、生産農家にとってはありがたいことです。生産資材や人件費の高騰が現実としてあるものの、経営継続のための再生産価格は維持できていると思ひます。今後もこの傾向は続いていくと考えられますが、喜ばしいことばかりではありません。高単価であっても担い手の不足からみかん生産農家が減り生産量の減少に歯止めがきかなくなっているのです。個々のみかん農家としては所得が安定的に確保されてよいのですが、地域として捉まえた場合由々しき事態です。どうすれば地域的な問題が解決に向かうのか想像できません。やはり、このピンチを打開するために私たち農業士の連携や情報共有、先導的な取り組みなど果たすべき役割あるのだと思ひます。地域農業の未来のために、私も微力ながらこの問題に立ち向かひます。



荷造り調整

私の農業

やってみたい事はなんでもやってみる

紀の川市 地域農業士
台丸谷 久実



1. はじめに

私は子供の出産を機に専業主婦になりました。二人の子供が保育所に通うようになり、昼間の時間だけ実家の畑を借り野菜作りを始めました。初めて育てた野菜が意外と上手に育ち、直売所に出荷して売れる喜びと育てる楽しさを味わい、年々栽培面積が増え、栽培品種も増え、少量多品目の年中切れ目なく栽培する農業スタイルになっていきました。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
柑橘	50a
野菜	50a
○労働力	
本人	
息子	

2. 農業経営の特徴

両親は柑橘と花木の専業農家で主人のアドバイスで農協出荷していた柑橘を通販で販売するようになり、両親が柑橘の栽培をし、私が発送をする担当で21年が過ぎました。野菜も旬の野菜をおまかせで詰め合わせて荷造りして通販もしていました。

息子が大学でアスパラガス栽培を学び、4年前に親元就農をした今は息子と二人で野菜の栽培をしています。

自分の育てた農作物を使って加工品を作ってみたいと思っていたので、みかん倉庫をリフォームして加工所と料理教室ができるキッチンを作りました。

自分で育てたトマトで作ったトマトソースや黒豆を使ったお味噌作り教室では、お友達やご近所の方たちとお喋りしながら楽しい時間を過ごしています。月に一度は自分で育てた農作物を使った料理教室をしています。

秋に収穫する黒豆の枝豆が大好きでこの美味しさをたくさんの方に知ってほしい、食べてほ



リフォーム後の加工所兼キッチン

しいとの思いから農園で秋祭りをやってみることにしました。家族やお友達に助けってもらって小さな農家の秋祭りを開催。黒枝豆の収穫体験や黒豆を使ったおにぎりや大福などの販売をしました。最初の年は100人ぐらいの方に来て頂き皆さんに喜んで頂けて自分も楽しい一日でした。その楽しさが忘れられずずっと続けています。今では有難いことに年々来て下さる方が増え、収穫体験だけでなく和太鼓や音楽バンドの演奏、よさこい踊りに手作り品のマルシェなどの催し物も増え今年で7回目の秋祭りをすることができました。

今年は夏の異常な暑さで思うような黒豆の出来ではありませんでしたが、来年はもっとみなさんに喜んで頂けるような黒豆を実らせたいと思っています。

3. おわりに

『人生は100年時代』と言われていますが、健康に過ごす為には何が必要か、50歳を過ぎ考えるようになりました。両親が80歳を過ぎても健康で今も現役で農業をしているのは、旬の色とりどりの野菜をしっかりと食べているからだと感じ、自分でも食べるものに気を付ける生活を始めると、肌質が変わり気になっていた体重も減り、改めて食べる物の大切さを知りました。

自分の体験したことを同じ年代の女性の方にも知ってもらいたくて、自分で育てた野菜や果物と自分で仕込んだ発酵調味料を使った腸活ランチ屋を始めました。農作業の負担にならないペースでのランチ屋ですが、SNSを使って日本人だけでなく外国人とのメッセージのやり取りも簡単にできるようになり、又インバウンドもあり外国の方も腸活ランチを食べに来て下さることも増えてきました。英語は全くしゃべれませんが、翻訳アプリでなんとかコミュニケーションができ、健康は世界共通の願いだと感じています。

やってみたい事はなんでもやってみる！やったことがない事はなんでも挑戦してみる！が私の心がけている事です。



みんなで腸活ランチ屋

ハウス柿を中心とした柿生産

九度山町 地域農業士

丹下晴夫



1. はじめに

私は、会社勤めをしていましたが、実家の農業を継ぎたいとの思いが強くなり、平成21年に18年間勤めた会社を辞め、平成22年の37歳の時に就農しました。

現在、就農して15年になりましたが、経営は富有柿の面積を増やしたこと以外は就農当初と変わらず、柿専作経営で約1.2haの規模です。その内訳は、渋柿主体で7月初旬から9月初旬に収穫できるハウス柿17a、9月上旬からの極早生「中谷早生」10a、これに続く「刀根早生」60a、10月中旬以降の「平核無」10a、11月以降の甘柿「富有」30aとなっており、両親と夫婦4人で農作業にいそしんでいます。ただし、露地の摘蕾時期とハウス柿の管理作業が重なる4～5月と7～8月の収穫には雇用してやり繰りしています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
ハウス柿（刀根早生）	17a
中谷早生	10a
刀根早生	60a
平核無	10a
富有	30a
合計	127a
○労働力	
家族	4人
臨時雇用	4～5人

2. 農業経営の特徴

ハウス柿栽培は、ビニールハウスで温度管理や肥培・水分管理をして高品質な果実を早期に収穫・出荷する栽培方法で价格的に堅調ですが、自発休眠後の1月から5月にかけての暖房代等に経費がかかります。そのため、二重被覆や暖房機の変温管理を徹底するなど低コスト化を図っています。温度管理には気を使っており、加温期間は1日に1回以上最低最高温度計の温度等を確認しています。夏場は、遮光ネットで遮光して高温になりすぎないように管理しています。

2～3月の摘蕾後にはシルバーシートを樹冠下に敷設し、反射光を利用して施設内の湿度対策と日照改善により、高品質果実生産に努めています。さらに、牛糞堆肥や有機質肥料の施用も積極的に取り入れています。

また、ハウスの横に貯水タンク4基（36t）を設置してハウスの雨水を貯水できるようにしており、スプリンクラーによるかん水で省力化を図っています。

施設内の高温・高湿の環境下での作業は大変つらいものがありますが、両親、妻とともに頑張っています。
露地の「刀根早生」では、生理落果防止や肥大・着色促進を目的に、5月下旬～6月上旬に樹勢の維持できている樹を中心に主枝剥皮し、大玉果生産に取り組んでいます。

3. 今後の経営方針

当面は、今までどおりハウス柿を中心に露地柿との組み合わせで、現状の栽培面積を維持しながら、作業の効率化を進めていきたいです。

また、この10年ほど毎年牛糞堆肥を施用していますが、牛糞堆肥等による土づくりをこれまで以上に推進し、高品質、高収益を目指していきたいです。

なお、将来展望として、柿と他果樹との果樹間複合や野菜等の他品目との複合経営も視野に入れて、技術力・経営力を高めていきたいと考えています。

4. おわりに

現在は両親が健在で夫婦2人と併せて4人でやっていますが、いずれは夫婦2人でやっていかなければなりません。また、燃料費等の高騰や異常気象など農業生産の環境も年々厳しくなっています。そのために、夫婦で今後の農業経営の在り方を話し合っています。

また、燃料費・資材費の高騰や高齢化で年々ハウス柿の生産者が減っていますが、これからもハウス柿を中心に据えて、その年最初の柿（ハウス柿）を消費者に届けていきたいと思っています。



柿のハウス



ハウスからの雨水の貯水タンク



粗皮削り・せん定後のハウス柿



毎年、牛糞堆肥を施用

私の農業

就農してから現在まで

有田市 指導農業士

南村 昌己



1. はじめに

私が就農したのは昭和55年で、県の農業大学校を卒業後すぐに就農し、温州みかん一本による果樹専作経営を行っております。

就農後すぐに4Hクラブに加入し、先輩や後輩などと、みかん栽培や農業経営に関する議論や情報交換などを行った事を思い出します。

また、自分が作った有田みかんを全国の消費者に届けられるよう、日々試行錯誤しながら努力しているところです。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	200a
極早生	60a
早生	70a
普通	70a
○労働力	
家族	3人

2. 農業経営の特徴

私の住む有田市は、450年以上続く有田みかんの産地であります。平地が少なく急傾斜地の多い温州みかん園では、石積み階段園を築いており、日当たりが良く、排水性が高いため高品質みかんを生産することができます。我家の園地を見ても、全園の4分の3が傾斜園であります。収穫や管理作業は大変ですが、その分美味しいみかんを生産することが期待できます。

私が就農した当時は、12月に出荷する普通温州がメインでありました。まずは、食味のよ



い品種への改植や労働分散を行うことを目的に、極早生や早生の比率を高めることに取り組みました。約25年前に現在の面積配分となり、雇用することなく家族労働力だけで経営することができております。

3. 今後の経営方針

我家では、息子が15年前より後継ぎとして就農してくれました。10年前に、私が選果場の副組合長を務めた事を契機に経営継承を行い、現在は息子が主となり農業経営を行っています。これからは、若者の視野・視点にも耳を傾けながらより良いみかん作りを共に行っていこうと考えています。

我家の生産物はすべてJAありだAQ選果場西部（前ありだ共選）に出荷しています。美味しいみかんを出荷すると高単価になるため大変やりがいを感じています。今後も品質の良いみかんを出荷できるように更なる栽培技術の向上に努めていきたいと考えています。

4. おわりに

私は、農大卒業後すぐに就農して、温州みかん一筋で早44年が経過しました。昭和61年に青年農業士として加入させていただき、現在指導農業士となり、今年度で農業士は卒業となります。たくさんの方々との知り合いになれ、成長できたと感じています。

和歌山県はみかんの産地として全国に知られており、有田市では1,000ha強のみかんが栽培されています。そのような環境の中でみかん農家に生まれ、小さい頃から代々続く農業を継ぐものだと自然に考えていました。これからも、地域の方々との協力しながら有田の農業を守っていききたいと考えています。



施設・露地複合経営からの転換

印南町 地域農業士

成 田 稔



1. はじめに

私は、印南町の印南地区で主に野菜を栽培しています。南部高校を卒業後に就農し、就農当時は野菜中心の経営で、数年後には花き栽培も始めました。しかし、10年を過ぎた頃から燃油価格が上がりはじめた一方で、販売価格が下がってきたこともあり、野菜専作に経営転換しました。

農業経営の概況

○作付け品目と面積	
小玉すいか	20a
えんどう類	10a
だいこん	10a
かぶ	5a
○労働力	
本人+妻	2人

2. 農業経営の特徴

現在は、妻と2人で経営しています。平成15年頃から、それまでJA出荷が中心でしたが直売所に出荷するようになり、多くの作物に取り組みました。

売上が少しずつ上向きになりはじめた平成23年5月末、突風によりビニールハウスが倒壊するという事態になり、施設栽培と露地栽培の複合経営から、完全に露地栽培のみに転換することになりました。

それから、主力作物を何にするのか、特に、それまで施設栽培が主であった秋から春にかけては何が良いのか試行錯誤しながら、春作にだいこんを選択しました。



だいこん



うすいえんどう



きぬさやえんどう

3. 今後の経営方針

私は今年、還暦を迎えます。少しずつではありますが体力も低下してきています。原材料費高騰の昨今、気象条件に左右される仕事でもあり、農業経営は厳しい時代ですが、現状に応じた作物の生産に取り組み、新たな販路開拓と高品質にこだわった野菜栽培に励みたいと思っています。

直売所では、小玉すいかの試食対面販売にも力を入れています。消費者と直接話すのは楽しく、思いもよらない情報をいただくこともあり、気づきや学ぶ機会になっています。

これからも、現状に満足することなく、さらに楽しい農業経営を目指します。

4. おわりに

数年前から鳥獣害にも頭を悩ませています。自身も狩猟免許を取得し、地域の仲間と情報共有して捕獲や追い払い等に取り組んでいます。作物を荒らすだけでなく、ハウスの被覆を破ったり棚を壊したりもするので、行政と連携し、農業仲間と安心して地域農業を守っていくことにも力を入れていきたいです。



印南町鳥獣被害防止対策協議会



私の農業

新鮮な梅とおいしいみかんを 消費者へ届けたい！

上富田町 指導農業士

家 高 勇



1. はじめに

私は県農業大学校を卒業した後すぐに就農し、約40年が経過しました。

就農時は、両親と一緒に早生温州を主体として少ない面積で経営していましたが、昭和60年頃から梅や極早生温州を導入して面積を拡大させていきました。

2. 農業経営の方針と状況

現在、我が家では、梅と温州みかん等を栽培しています。

梅は「南高」を中心として、労力の分散を図るため、青梅と漬け梅の両方を行っています。青梅はJAへ出荷し、漬け梅は近くの梅加工業者へ販売しています。

極早生温州は、「日南1号」を中心とし、約20年前から上富田町の仲間（約20名）と一緒に、農薬の使用を最小限に抑えた栽培で、コープこうふードプラン「上富田みかん」として販売しています。

化学農薬の使用を慣行栽培に比べ半分以下にするため、化学農薬としてカウントされない農薬を使用したり、除草剤の使用をやめて草刈り機で除草を行っています。肥料は有機配合肥料を施用し、土づくりのために堆肥等を投入しています。

さらに、消費者との交流を深める事を目的に、毎年秋には神戸市の方々を上富田町に招いて、みかんの収穫体験を行っています。

早生温州については、老木化が進んでいるため、優良極早生品種の「ゆら早生」や「YN26」に改植しています。これら品種は糖度が高く、食味が良好のため高単価で販売されます。

3. 今後の経営方針

梅栽培で収穫の次に大変な作業はせん定です。

私は、県やJAが推進している新梢の摘心処理を行って徒長枝の発生を少なくし、冬季のせん定作業を省力化したいと考えています。

農業経営の概況

○作付品目と面積

梅	160a
極早生温州	40a
早生温州	30a
晩柑	10a

○労働力

家族	2人
臨時雇用（収穫時）	5人

摘心処理を行うことで、徒長枝の発生を少なくするとともに、結果枝を増やし、収量の増加も目指しています。さらに、青梅収穫園は、カットバック処理し、樹高を下げることで管理作業を楽にする予定です。次に、極早生温州では、夏季の猛暑の影響で日焼け果が多く発生して問題となっています。そこで、JAの勧めで試験的にみかん園の上部へナイロン線を張り、そこに寒冷紗をかけて日焼け防止対策を行いました。効果は予想以上にあり、収穫時に日焼け果が少なくなったことから、来年も続ける予定です。

また、薬剤散布では、すでにほとんどの園地でスプリンクラーを設置し、省力化を図っていますが、最近ではドローンでの薬剤散布に関心を持っています。将来ドローンの価格が安くなり、性能がもっと向上すれば我が家でも導入したいと考えています。



梅「南高」園



極早生温州「日南1号」園



梅のせん定



晩柑「はるみ」の収穫

4. おわりに

私も65歳になり、指導農業士の定年を迎える年となりました。農業士の仲間に入れていただき、特に女性部会活動では、うめの消費PR活動における出前授業や先進地研修、セミナー等、楽しい時を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

息子も仕事をしながら、農業を手伝ってくれていますが、いつか後継者になってくれたらと思います。それまで夫婦元気で、農業ができればいいなと思います。

農業に懸ける想い

～生まれ育った土地の振興を目指して～

和歌山地方4Hクラブ連絡協議会

小畑 雄二郎



1. はじめに

私は、2019年2月に和歌山県農林大学校園芸学科を卒業し、小畑家8代目として農家になりました。

農業を志したのは、高校1～3年生で、その頃、農地減少の速さに危機を感じたこと、ニュースで日本の自給率が約38%であると目にしたこと、家業が代々農業だったことなどが理由です。

2. 農業への想い・取り組み

自分が、農業をしている現代は、先代の祖父の時代に比べ、田畑周辺の宅地化が進み、住宅が多くなり、トラクターなどの農機の騒音問題があるため、7時前の早朝や日没後の機械作業は、気を遣いながら行っています。農業をしていく上で、住宅地での肩身は少し狭いですが、日本のためにも住民の皆様のためにも、自分のような、若い担い手も大事と理解される行動も必要だと思います。

これからしていきたい営農は、先祖代々してきたにんじん、ほうれんそうなどの品目も栽培しながら、自分が思う野菜の栽培も増やし、耕作放棄地も、担い手問題も解決したいです。今すぐは難しいかもしれませんが、自園でとれた野菜を使ったカフェを経営し、6次産業化も行い、循環型農業を目指します。

3. おわりに

生まれ育った土地、和歌山市福島という地に、農業を核として、人が楽しく明るく集い、働き、時には憩いの場として、交流ある場を作れる日を夢見て、頑張っていきます。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
にんじん	55a
ほうれんそう	65a
水稻	25a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	1人



農園の様子



ほうれんそうの出荷調整

農業に懸ける想い

私と農業

紀の川市 地域農業士

畠山 武



1. はじめに

私の家は昔から遠方で果樹農家を営み、近年は平地では八朔から桃への転換を進め、現在の経営に至っています。

私は、サラリーマンを経験した後、親の後を継いで就農しました。

2. 農業への想い・取り組み

就農した当時は、父母と家族3人で作業し、農繁期にはパートの方3人くらいに来てもらって管理していました。そして結婚後は妻にも農作業を手伝ってもらえるようになり充実した日々を過ごせていたと思います。

しかし、最近では両親も年を取り、忙しい日々を過ごすようになり、就農当初に思っていた時間が自由になる自営業の良さを感じられないくらい忙しくなってきました。

これからは、私たち自身も年齢を重ねていくので今のままでは畑の維持管理を出来なくなるかと思っています。

今後は、栽培方法の見直し、間伐などその他にも新品種、新品目への取組など新しいことへのチャレンジをしていきたいです。

幸い、私のまわりには若い農家さんが多く、新しい情報がいろいろと入ってくるので、教えてもらうことがたくさんあり、彼らと切磋琢磨して農業をしていきたいと思っています。

農業経営の概況

○作付品目と面積

桃	80a
柿	70a
みかん	140a
八朔	30a

○労働力

家族	4人
臨時雇用	1～5人



傾斜地の柿畑



園内道とスプリンクラを設置

農業に懸ける想い

～柿から花木生産へ～

九度山町 地域農業士
坂本佳久



1. はじめに

私は、昭和59年に和歌山県農業大学校を卒業後、すぐに桃山町植木組合に就職しました。13年間勤務した後、子供が幼稚園へ入園するのを契機に、実家の農業を継ぎたいとの思いが強くなり、34歳の時に九度山町に戻り就農しました。

両親が営んできた柿栽培170aを引き継ぐと同時に、これまでの勤めの経験を活かして花木生産を始めました。

柿生産は、一時200aまで規模拡大しましたが、経営方針を変えて現在は規模を20aまで縮小しました。その分、花木生産は、100a（9カ所）まで増やしています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
花木	100a
柿（富有）	20a
○労働力	
家族	1人
常雇用	3人

2. 農業への想い・取り組み

花木生産は、九度山町安田島の圃場整備された水田転換畑9カ所で約100a栽培していますが、いずれも見通せる範囲内にあります。そのうちの60aはスプリンクラー（サンホープ）利用によるかん水の省力化で作業の効率化を図っています。除草に一番労力がかかり、地中ポットで栽培する畑では水を入れて代かきをして雑草対策をしており、ポット栽培では購入培土を利用して対策しており、併せてイネ科雑草防除用の除草剤も利用していますが、まだまだ草との戦いです。主力品目は、ユキヤナギ、サツキ、ヒラドツツジ、レッドロビン、シラカシで、合計20種類ほどを生産しています。品目を増やすと生産・出荷でリスクが増えるので、主力品目にある程度集中して生産しています。

一方、柿は、当初より縮小して「富有」のみ20a栽培していますが、炭そ病等の被害や、面積あたりの収量が少なく収穫までの期間が長いので労力がかかることで、今後は経営を完全に花木生産に移行したいと思っています。

最近、夏場の高温・干ばつ、集中豪雨など気候変動や鳥獣害の増加等により、年々栽培が難しくなってきたと思います。また、私の周辺でも農業後継者が減っており、とくに若い世代はほとんど見かけなくなっています。少しでも恩返しになればと思い、10年ほど前から県農業大学校の学生を受け入れ、今後も後継者育成や雇用の面で地域貢献しながら、地域の皆さんと交流していきたいと思っています。



花木類（吹上ポット）



レッドロビン（地中ポット）

農業に懸ける想い

高品質なみかん栽培を目指して

有田川町 青年農業士

宮地 智也



1. はじめに

私は高知大学農学部を卒業後、一般企業に就職しましたが、父親の体調不良をきっかけに平成28年に就農しました。就農後1年程度は、親から栽培技術を学びました。それから先は、畑を親とそれぞれに分け管理しました。現在では、温州みかんをはじめ、不知火やすももを栽培しています。

2. 農業への想い・取り組み

温州みかんはJAのAQ選果場に出荷しています。AQ選果場柑橘部会では、「味一みかん」などの個性化商品として、高品質みかんの基準を定めています。私もマルチ栽培や後期重点摘果、上部分割採集などの高品質栽培に取り組み、「味一みかん」として出荷できるよう、毎年、挑戦を続けています。

先代からの園地は、様々な品種が混植されていることも多く、作業効率を高めるため、古い樹は積極的に改植を進めています。極早生ではゆら早生への改植を積極的に行っています。

就農2年目頃から園地ごとの品質や選果データなどの記録を取ることを心がけています。記録を取ることで園地の状況や品質向上につなげるために何をしなければならないかわかってきます。品質の悪かった園地をマルチなどで品質を高めることができた時は、私にとって大きな自信となりました。

近年は、温州みかんの販売単価が高く推移しています。生産者にとって良いことですが、消費者の方にも価格に満足してもらえる品質を目指していきたいと思っています。また、これからは私自身が持っている栽培技術や情報は、地域農業の発展のために若い農業関係者に積極的に伝えていきたいと思っています。

最後に、よく「サラリーマンとどちらが良いか？」と聞かれますが、農業は自分がやったことは、きちんと結果として樹が応えてくれるのでとてもやりがいを感じています。



改植した園地



上部分割採集

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	280 a
極早生	60 a
早生	150 a
普通	70 a
不知火	20 a
すもも	20 a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	3人

農業に懸ける想い

分散型独立農業モデルの構築

日高町 地域農業士

白井雄太



1. はじめに

私は、高校卒業後、祖父の体調不良をきっかけに19歳で就農しました。しかし、就農後1年もたたずに祖父が他界し、祖父の技術を継承することが出来ず、右も左もわからない状況の中農業経営をしてきました。

当時はインターネットが普及していなかったので、JAの営農指導員さんや、地域の農家の方に教えを請うも、一向にうまくいかない農業経営にもがいていました。

農業経営の概況（グループ全体）

○作付品目と面積	
水稻	1,200 a
施設野菜	850 a
露地野菜	300 a
○労働力	
メンバー	7人
臨時雇用	5～15人

2. 農業への想い・取り組み

現在は、若手の農業者数名でグループを作り、作業拠点や農機具を共有し助け合う分散独立体制で農業経営をしています。

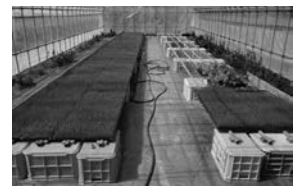
メンバーの1人は、私の就農当初から一緒に農業をしてきた幼馴染みの友人です。現在は友人と私が指導する側となり、他のメンバーがいます。

メンバーは私以外非農家であり、新規就農者が4名います。私自身技術がわからないまま農業を始めたので、就農の難しさをよく理解しており、若い頃の苦しい経験から新規就農者を応援したいとの気持ちが芽生え、この仕組みを考えました。

就農する際の一番大きな壁となる農機具の高騰、都会からの移住者の土地勘のなさ、作物を作ることは学べても、作る環境づくりがないことが重要な課題となっています。そういった課題を根本的に解決するため、メンバー全員が担当する農地を持ち、それらを統合して情報や労力、販売ルートを共有する農業をしています。

主に施設栽培と稲作をメインとし、メンバーが増えるにつれて耕作面積を拡大してきました。

また、昨年はこの仕組みを組み込んだ「一般社団法人アッセンブル日高」を設立しました。将来的にはこの仕組みで町内の新規就農者の就農定着率を上げていき、日高町のみならず県内外の過疎地域や耕作放棄地の削減に助力していきたいと思っています。



共同育苗施設



出荷作業風景



定植風景



共同農機具

農業に懸ける想い

農業で人と人、人と自然をつなぎたい

白浜町 青年農業士

遠藤 賢 嗣



1. はじめに

私は、京都府出身で、子供の頃からの夢だったイルカのトレーナーになるため、白浜町のアドベンチャーワールドに就職しました。ところが、同町で生活しているうちに「もっと身近に自然を感じる仕事をしたい」と考えるようになり、県の就農支援センターで農業技術を学んだ後、補助金等を活用して2019年3月に就農しました。

現在、レタスやとうもろこし、ケイトウ等を栽培し、JAを中心に産直やネットで販売しています。

2. 農業への想い・取り組み

白浜町は観光客、ビジネス客が多く訪れ、また移住者も多く住んでいますが、まだまだ地元産の野菜や花に触れる機会は少ないと思います。また、野菜や花を生産している「畑」は全国的にも身近に存在していながらも気軽に立ち入れる環境にはありません。そのため、農業に興味を持ってもらうには、地域住民や、ホテル、飲食店、観光客の方々に白浜の野菜や花を身近に感じてもらうとともに、気軽に「畑」に来てもらい、楽しんでもらえるような環境づくりが大切であると考えます。

また、全国同様当地域も農家の高齢化が著しく、今後地域農業の運営はさらに厳しさを増すと考えられます。そのため体験事業は、様々な生活スタイルを持つ方に農業を身近に感じ、興味を持ってもらい、農業をやってみたいと思ってもらえるために、非常に重要な事業であると感じています。

私は、作物を栽培するだけでなく、畑の散歩や草花の観察、野菜や花の収穫体験など、子供から大人まで楽しめる企画を提案しています。今後は、種まきから収穫まで1年間を通した体験型農園をおこなっていきたいと考えています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
レタス	160a
とうもろこし	100a
ケイトウ	28a
□メインレタス	12a
ストック	10a
その他	14a
○労働力	
本人	
常時雇用	1人



レタスの収穫



とうもろこしの試食



遠藤家族

県農林大学校学生です

～農林大学校1年生の自己紹介&近況報告～

農学部 園芸学科



土橋 漢

以前はあまり農業に興味がなかった私ですが、紀北農芸高校に入学後、農作物の栽培を通して農業の楽しさや面白さを知り、高校卒業後も農業に携わりたいと思い農林大学校への進学を決めました。

専攻は野菜コースで、実習では播種、定植、収穫、出荷調整などを学んでいます。実習ではしんどいことも多いですが、仲の良い友達に支えられながら頑張っています。

卒業後は、農大で学んだことを活かせる仕事に就きたいと考えています。

私が農林大学校に入学した理由は、初心者が一から農業を学び、卒業後の就農も視野に入れられると考えたからです。

卒業後は、まず県庁の農学職に就職したいと考えています。理由は、入学してすぐの「農業試験研究施設視察」で農業試験場を訪れた際に、品種改良に興味を持ったからです。「まりひめ」が和歌山県のブランド品になったように、私もこのような未来の農業を担う職業に就きたいです。そして将来的には農家として農業を支えていきたいです。



西谷京悟



濱野七宏

私は由良町出身で、日高高校を卒業しました。

消費者の方からの「濱野さんのお父さんが作る野菜はみずみずしくておいしいね」「お父さんが栽培する野菜だったら息子が食べてくれるよ」という言葉を聞いたのがきっかけで、私もみんなにおいしいと言ってもらえるような野菜を作りたいと思い、農林大学校に入学しました。

家の農業を継いだ時に活かせるよう、野菜コースで様々な野菜の栽培方法を学びたいです。そのために、積極的に授業や実習に取り組むとともに、様々な資格が取得できるこの機会を逃さず、自分の将来に役立てられるようにしたいです。

私は岩出市出身で、高校は紀北農芸高校に通っていました。家は米と野菜を栽培している兼業農家です。

農林大学校に入学した理由は、高校で花を専攻していたことから、花の技術と知識をより深く学びたいと思ったからです。

現在のところ明確な将来の目標はありませんが、日々の勉強を頑張ります。



藤井将貴



宮 脇 啓 聡

私は和歌山市出身で、貴志川高校を卒業しました。家では米と野菜を作っています。農林大学校に入学しようと思ったきっかけは、もともと農業に興味があり、もっと本格的に農業を学びたかったからです。将来の夢は、家族で農業一本で食べていくことです。

この学校に入ってかなりの知識を得られたと思うので、その知識を必ず家の農業に活かしていこうと考えています。農業をすることがどれだけ楽しいか、少しでもみんなに分かってもらうのもまた一つの夢です。

私は和歌山市出身で、紀北農芸高校を卒業しました。

農林大学校を選択した理由は、幼い頃から植物が好きだったからです。自家では色々な種類の果樹を栽培しており、物心つく頃から植物が好きでした。その中でもとくに草花が好きだったので、高校・大学共に花コースを選びました。

将来的には自家を継ぐ予定ですが、その前に花を扱う仕事に就きたいと考えています。そのため、私は大学でもっと詳しく農業について学びたいと思っています。



矢 出 葵

農学部 アグリビジネス学科



西 彩 名

曾祖父が農家だったのがきっかけで農業に興味を持ち、家から近い農林大学校に入学しました。

現在、私は野菜コースを専攻しています。実習で実際に農作業をやってみて、色々な栽培方法を学んで、農作業の楽しさを知ることができました。実習の時間は暑くてくじけそうになることも多いですが、同じ夢を持つ仲間がいるおかげで支えられています。

これからもしっかりと農業の勉強をし、学校生活をみんなと頑張っていきたいです。

私は海南市出身で、海南高校を卒業しました。

農林大学校に入学した理由は、家業のみかん農家を将来継ぐために、実践的なことを学べると考えたからです。

入学した頃は、卒業後すぐに就農するつもりでしたが、家族や学校の先生方と相談し、一度社会に出て視野を広げてみるのもありかな、と就職も選択肢の一つになりました。進路変更にはなりますが、これも視野が広がったと前向きに捉え、今後の学校生活でも積極的に新たな自分を築いていきたいです。

また、経営主として家業を営んでいくための経営感覚を在学中に身につけたいと思っています。



東 本 滉 平



松 本 昇 士

私は海南市出身で、海南高校を卒業しました。家業のみかん農家なので、小さい頃から農業に触れてきました。

農業の知識をつけるために農林大学校へ進学しましたが、同時に、生産された作物の流通、加工の過程に興味を湧いたので、アグリビジネス学科を選びました。

卒業後は、就職を経て家業であるみかん農家を継ぎたいと考えています。農大に来てからは大変なこともあります。毎日が楽しいのでここで学べることに全力で臨みたいと思っています。

試験研究レポート

REPORT

ウンシュウミカンにおける耐雨性に優れた黒点病の防除対策

和歌山県果樹試験場 環境部 副主査研究員 直川 幸生

1. はじめに

黒点病はウンシュウミカン栽培における重要病害で（図1）。本病の防除には主にジマンダイセン水和剤（以下、ジマン）の600倍が使用されており、5月下旬頃の1回目散布以降は、前回散布の1か月後または累積降雨量200～250mmのいずれか早い方のタイミングで次の散布が実施されています。しかしながら、近年では集中豪雨などにより、散布できるタイミングがないまま累積降雨量が250mm以上に達するケースが増加しています。

そこで本研究では、250mm以上の降雨にも対応できる耐雨性に優れた防除法を確立するため、展着剤アビオン-E（以下、アビオン）の加用とジマン400倍の防除効果について検討しました。

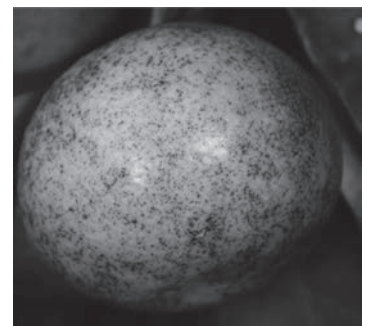


図1 黒点病の被害果実

2. アビオンの加用濃度の検討

アビオン500倍、1,000倍、1,500倍の各濃度について、ジマン600倍への加用による耐雨性の向上作用を調査しました。6月5日に薬剤を散布し、経時的に発病を調査した結果、いずれの濃度の加用区も単用区と比べて100mm程度耐雨性が向上しました（図2）。このことから、アビオンの加用濃度は経費が最も安くなる1,500倍が適していると考えられました。

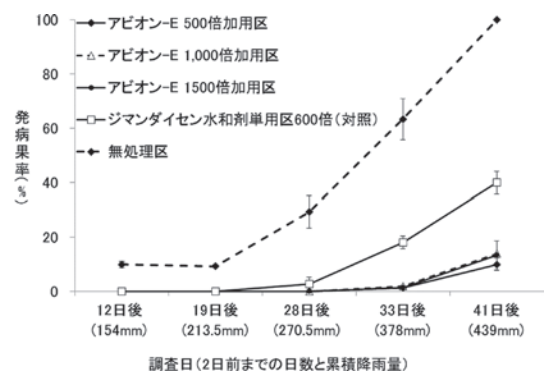


図2 ジマン600倍へのアビオン加用濃度が発病果率の推移に及ぼす影響（2019年）
※エラーバーは標準誤差を示す

3. ジマン400倍、ジマン600倍+アビオン1,500倍およびジマン400倍+アビオン1,500倍の防除効果

各区の薬剤を6月8日に散布し、防除効果の持続性について調査しました。その結果、ジマン400倍は散布27日後（累積降雨量411mm）まで高い効果が持続し、対照のジマン600倍（散布22日後、累積降雨量266mm）より優れました。また、ジマン600倍+アビオン1,500倍はジマン400倍と同程度の効果を示しました。さらに、ジマン400倍+アビオン1,500倍は散布30日後（累積降雨量597mm）まで高い効果が持続し、ジマン600倍と比べて300mm程度耐雨性が向上すると考えられました（図3）。

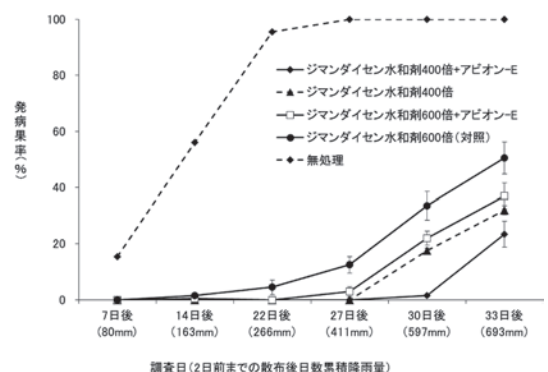


図3 各処理区における発病果率の推移（2020年）
※エラーバーは標準誤差を示す

4. ジマン400倍+アビオン1,500倍の体系防除試験

これまでの試験から、ジマン400倍+アビオン1,500倍は次回散布の累積降雨量の基準を300mm延長し、500～550mmにできると考えられました。そこで、2021年から2022年にかけて、表1の基準で体系防除試験を3回行いました。その結果、すべての試験でジマン600倍の慣行防除より防除効果が優れる結果となりました（図4）。

表1 体系防除試験の散布基準

試験区	次回散布の基準
ジマン400倍 +アビオン1,500倍	前回散布後30日または 累積降雨量500～550mm
ジマン600倍（慣行）	前回散布後30日または 累積降雨量200～250mm
無処理区	—

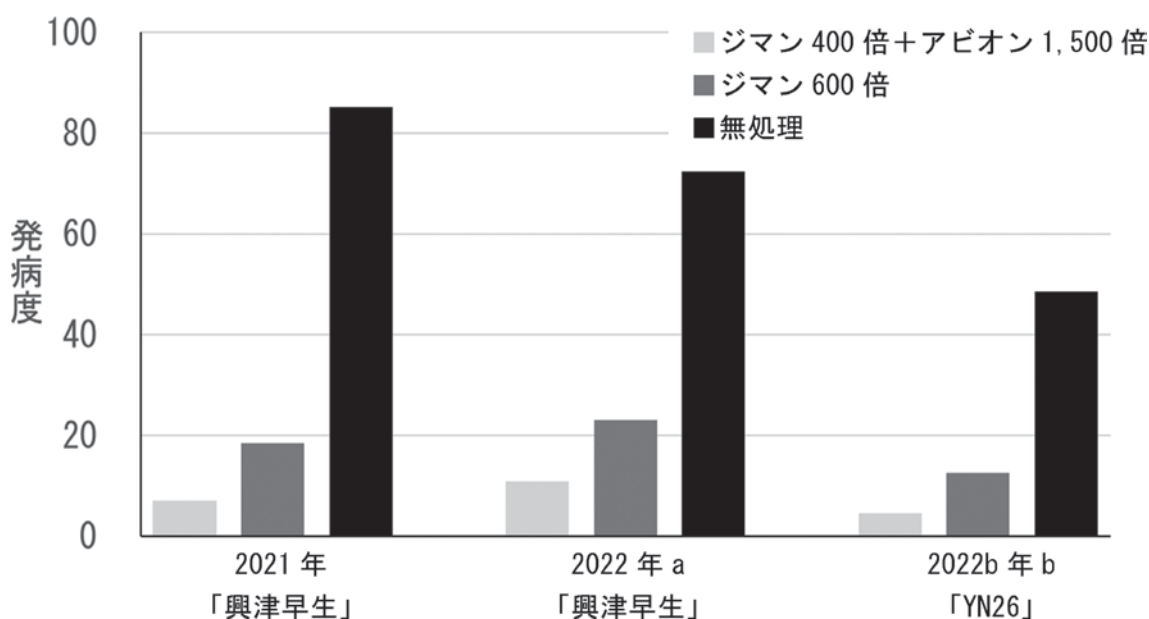


図4 体系防除試験の防除効果

※発病度は、0に近いほど発病の程度が軽微で100に近いほど激しいことを示す

5. まとめ

以上の結果から、ジマン600倍へのアビオン1,500倍の加用およびジマン400倍での使用は、いずれもジマン600倍より耐雨性が向上すること、また、ジマン400倍にアビオン1,500倍を加用するとさらに大きく耐雨性が向上することが明らかとなりました。

本手法は250mm以上の降雨に対応できることに加えて、多雨による前倒し散布を行わなくて済むため、散布労力の軽減や農薬の使用回数を減少させる効果も期待できます。

最後に注意点として、ジマン400倍はみかん以外の柑橘では適用がありません。そのため、中晩柑類ではアビオンの加用による耐雨性の向上作用をご活用いただければと思います。

試験研究レポート

REPORT

辛味果実が発生しないししとうがらし品種「ししわかまる」について

農業試験場暖地園芸センター 育種部 研究員 神藤 千乃

1. はじめに

本県では、中山間地を中心にししとうがらしが栽培されていますが、栽培条件によって辛味果実が発生することがあり、これらは栽培技術や出荷時の選別では完全に取り除くことが困難であるため、問題となっていました。

この問題に対応するため、暖地園芸センターと京都教育大学との共同研究により、辛味果実が発生しないししとうがらし品種「ししわかまる」（写真1）を育成しました。

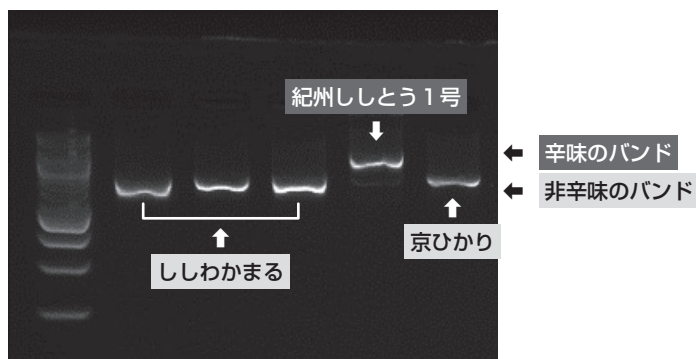


写真1 「ししわかまる」果実

2. 「ししわかまる」の育成過程や特性等について

(1) 「ししわかまる」の育成過程

「ししわかまる」は、平成25年度に在来品種「紀州ししとう1号」に、辛味成分を合成しない特性を持つピーマン品種「京ひかり」を交雑し、果実形質や収量等による系統選抜とDNAマーカー選抜*（図1）を行い、令和2年3月に品種登録出願、同年7月に品種登録出願公表されました（図2）。



※DNAマーカー選抜

特定の遺伝子（今回の場合は辛味成分を合成する遺伝子）の有無を分析することで、目的とする個体を選抜する技術。

図1 DNAマーカーによる辛味遺伝子の検定

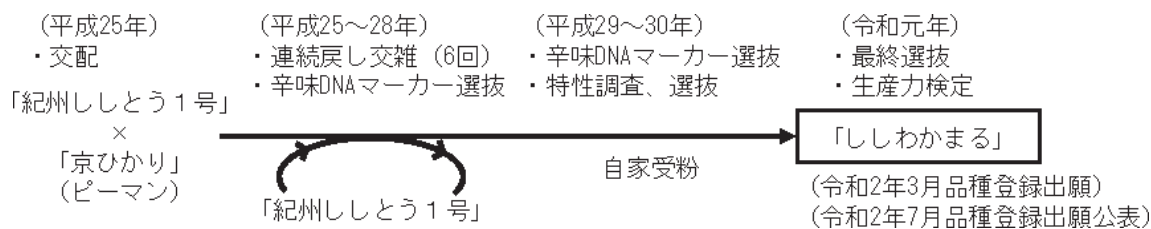


図2 「ししわかまる」の育成課程

(2) 「ししわかまる」の特性

果実特性（果実の大きさ、色、形などの外見）および、収量性（収量や秀品率）については、在来品種「紀州ししとう1号」と同程度です（写真2）。「紀州ししとう1号」とは異なり、辛味成分を合成する遺伝子を持っていないため、辛味果実は発生しません。

(3) 種苗供給体制について

県では、和歌山県農業協同組合連合会と利用許諾契約を締結し、令和6年作からJAを通じて県内生産者への定植苗の供給を開始しています。



写真2 果実特性の比較

3. 現在の取組について

「ししわかまる」は、主力品種の「L3 葵ししとう」と同じ栽培管理では、草勢が低下しやすく、それに伴い収量や秀品率が劣ります。この問題に対し、農業試験場において収量性を向上させる栽培管理技術を検討するとともに、当センターでは、「ししわかまる」と主力品種を交雑し、果実形質や収量等による系統選抜とDNAマーカー選抜を行いながら、多収で辛味果実のない品種の育成に取り組んでいます（写真3）。



写真3 露地トンネル栽培での系統選抜
(暖地園芸センター)

4. まとめ

「ししわかまる」は辛味果実が発生しないため、お子さんや辛味が苦手な方も安心して食べられるししとうがらしであり、その特性を活かして生産振興に取り組むなかで、市場からも高い評価を得ています。今後も生産現場と連携して普及に取り組むとともに、より多収で高品質な系統の育成を進めていきます。

試験研究レポート

REPORT

「露茜」安定生産のための「片側一文字仕立て」栽培技術の開発

果樹試験場うめ研究所 研究員 向日春輔

1. はじめに

果皮および果肉が赤く着色する「露茜」は加工原料として高い需要があります。しかし、樹勢が弱く、着果負担により突然枯死する場合もあることから、安定生産が難しいことが問題となっています。現場では主幹形仕立てが普及していますが、さらなる安定生産のための技術が求められていました。そこで、「露茜」の着果特性（やや強めの発育枝で着果が優れる）を活かした仕立て方「片側一文字仕立て（以下、片側一文字）」の技術および肥培管理技術を開発したので紹介します。なお、主幹長を2mに設定したものを「片側2m」、1mに設定したものを「片側1m」としました。

2. 試験研究の内容・結果等

(1) 「片側一文字」の仕立て方について

片側一文字は、主幹を一定の高さで水平に誘引する樹形です（写真1）。まず、1年目に鉄管を地面から70cmおよび140cmの高さで2段になるように設置します。そして、1年生苗木を定植してから下段の鉄管（70cmの高さ）に誘引します。次年度以降は、強風による枝折れ対策のため、新梢は上段の鉄管（140cmの高さ）に上向きに適宜誘引します（図1）。

片側一文字は主幹形より樹冠占有面積が小さいため、10a当たり植栽本数が片側2mで約200本、片側1mで約250本となり、主幹形の約160本に比べて多くなります。なお、樹冠占有面積（5年生実測値）は片側2mで5m²（縦2.5m×横2m）、片側1mで4 m²（縦2m×横2m）、主幹形で6.25 m²（縦2.5m×横2.5m）が目安です。

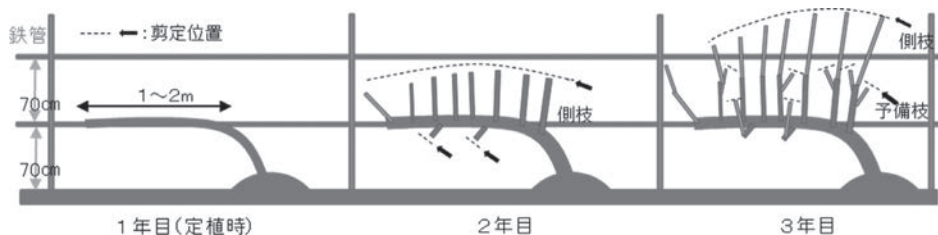


図1 片側一文字の仕立て方



写真1 4年生の「露茜」

(2) 収穫効率および剪定時間

収穫効率について、2024年（6年生）に収穫時間および収量を調査して、1時間当たりの収量を算出しました。その結果、主幹形と比較して片側2mで収穫効率が優れており、片側1mでは同等の効率となりました。せん定時間について、2024年（6年生）に1樹当たりせん定時間を計測して、10a当りに換算した結果、主幹形と比較して片側2m、1mで短縮されました（表1）。これらのことから、片側一文字は枝が概ね一定の高さに配置されており、かつ作業動線が直線のため、主幹形より植栽本数が多くても作業の省力化が図れます。

表1 収穫効率および10a当たり剪定時間

試験区	収穫効率(kg/h)	剪定時間(h:m)
片側2m	100.0	43:04
片側1m	85.5	45:58
主幹形	84.4	52:32

※10a 当たり植栽本数を片側 2m : 200 本、片側 1m : 250 本、主幹形 : 160 本として算出
※作業員 1 名で作業した場合

(3) 1樹当たり収量および10a当たり収量

片側一文字の収量について、2021年～2024年（3年生～6年生）に1樹当たり収量を調査しました。その結果、片側一文字が主幹形に対して4年生まで多く推移しました（図2）。10a当たり収量に換算した結果では、片側一文字は主幹形に比べて植栽本数が多くなるため、累積収量は片側一文字が主幹形に対して6年生まで多く推移することが示されました（図3）。

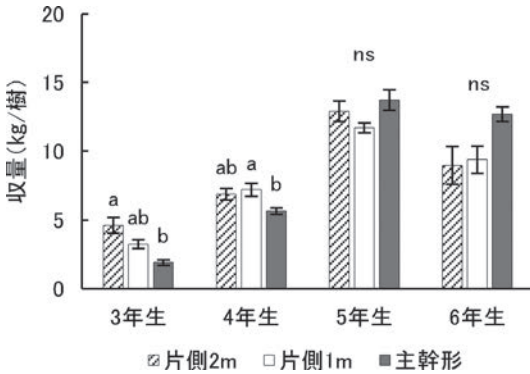


図2 各樹形の収量（3～6年生）

図中のバーは標準誤差を示し、各年生における異符号はTukeyの多重検定で有意差があることを示し、nsは有意差がないことを示す（3,4年生はn=4、5,6年生はn=4）。

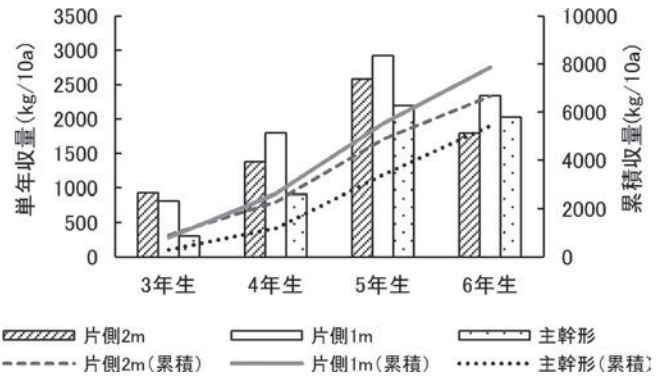


図3 各樹形の10a当たり収量（3～6年生）

※10a当たり植栽本数を片側2m：200本、片側1m：250本、主幹形：160本として算出

(4) 片側一文字の肥培管理

生育初期の施肥について、有機配合肥料、肥効調節型肥料、化成肥料を施用した場合、有機配合肥料が最も生育が優れ、化成肥料で供試した5本のうち4本が枯死したため、有機配合肥料の施用が適しています（データ省略）。また、生育初期の有機配合肥料の施肥量について、「南高」基準施肥量（1本あたりの年間窒素量が2年生で100g、3年生で140g、4年生で200g）、2倍量および半量で施肥を行い、生育量を調査しました。その結果、徒長枝本数（図4）および樹容積（図5）は基準施肥量と同量および2倍量で差はなく、半量で抑制される傾向であったため、基準施肥量と同量が適当です。

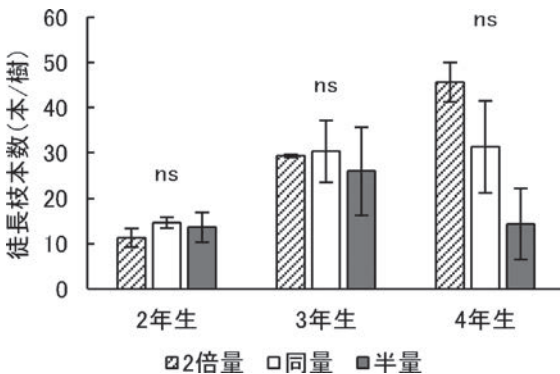


図4 施肥量別の徒長枝本数（2～4年生）

図中のバーは標準誤差を示し、nsはTukeyの多重検定で有意差がないことを示す（n=3）。

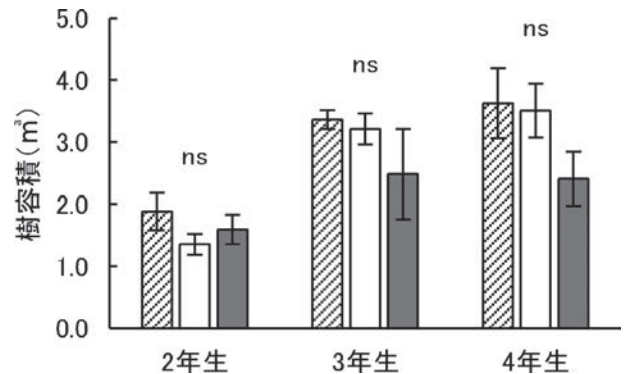


図5 施肥量別の樹容積（2～4年生）

図中のバーは標準誤差を示し、nsはTukeyの多重検定で有意差がないことを示す（2年生はn=4、3,4年生はn=3）。

3. まとめ

本研究により、「露茜」において、片側一文字は主幹形と比較して、植栽本数が多くなることや作業性の向上により、初期収量の増加および作業の省力化が期待されます。

なお、コストの面では、10a当たりの初期費用（資材費と苗代の合計）が、主幹形の約26万円に対し、片側2mでは約47万円、片側1mでは約53万円となり高くなりますが、定植4年目の10a当たりの累積の収益は、主幹形の約50万円と比較して、片側2mで約96万円、片側1mでは約109万円となり、定植後4年目で初期費用を回収できます。

農業士会支部活動レポート

REPORT

令和6年度和海地方農業士会活動ダイジェスト

和海地方農業士会事務局

1. 和海地方各農業士会等が総会を開催

和海地方では4月4日に下津農業士会総会（農業士会員14名出席）、23日に和海地方農業士会総会および研修会（農業士会員28名出席）が開催しました。

いずれも、令和5年度の活動報告、会計報告、新年度の活動計画などの議案はすべて可決され新旧役員の引継ぎが行われました。

下津農業士会総会後には、令和5年度で農業士を定年された岩本治氏から「土壌から見た柑橘栽培」と題して記念講演が行われました。

和海地方農業士会総会後には、「地球温暖化に対応した農業について」と題して和歌山地方気象台の杉岡リスクコミュニケーション推進官から講演が行われました。

昨年5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行して以来、初めての総会であり、飲食を伴う情報交換会も行われ、コロナ対応の閉塞感から解放されたひとときでした。



下津農業士会総会



和海地方農業士会総会

2. 河西農業士会が農業士認定制度について説明会を開催

4月17日、河西農業士会（会長：増田 恵一郎氏）は、河西地区の農業士を増やすため、中州出荷組合で説明会を開催しました。当日は、会員8名と地区内の農業者8名が出席しました。会長の挨拶の後、会長から昨年度実施した研修会や県外視察について、副会長から農業士となるメリットについての説明がありました。また、会員から、「横のつながりが出来る」、「意見を出し合うことで地区全体の活性化につながる」、「県外研修は自身の勉強になる機会である」等の説明もありました。参加者からは、研修会の内容や頻度について質問があり、地区内の農業者同士で情報交換するよい機会となりました。

参加者から、農業士が生まれることを期待しています。



会員から参加者に説明

3. 「みかん出前授業」を開催（下津町農業士会）

下津町農業士会（会長：馬場伸之氏）は 将来を担う子どもたちに下津みかん産地の現状や課題、農業の魅力を学んでもらうことを目的として、毎年、地元の下津第二中学校で出前授業を行っています。今年は10月25日、2年生32名を対象に開催しました。

昨年は体育館での講義、グループワークでの授業でしたが、今回は畑に出向き、石垣で積んだ段々畑や、みかんがなっている樹を見ながら農業士から説明を行いました。みかん産地の中学生といっても今では農家の子弟はほとんどいません。あたりまえに見ている景色が農業遺産に認定された全国に誇る産地であることに驚いた様子でした。

農業士が生産したみかんも試食してもらい、一つのみかんが丹精を込めて作られていることも理解してくれたようで、感想文では「みかんを作るうえで農家さんの大変さや和歌山の魅力をとても知ることができた」など、農家の苦労や産地の魅力などについて理解を示す感想も多かったです。今後、みかん産地で育つことに誇りを持ちながら成長してくれることを期待できる出前授業になりました。



石垣段々畑での説明



貯蔵ミカンの説明

4. 農業者年金研修会を開催（河西農業士会）

河西農業士会（会長：増田 恵一郎氏）では、12月3日に中洲出荷組合会議室にて農業者年金についての研修会を開催し、会員7名が参加しました。和歌山県農業会議の向井元治氏を講師に、農業者年金についてパワーポイントでの説明が行われました。人生100年時代を迎えた現在、これからの生き方を考えるために公的年金の種類や農業者年金の特徴について情報が提供されました。参加者からは、「税制上のメリットがあり働き盛り世代は加入しておいて損は無い」、「過去にサラリーマン経験があるが加入できるのか？」など意見や質問がありました。今後も本制度について疑問等があれば講師の指導の下対応することとしました。これからも農家生活の安全・安心につながるよう情報提供や研修機会等を設けることとしています。



研修会の様子

農業士会支部活動レポート

REPORT

那賀地方における農業士活動

那賀地方農業士協議会事務局

1. 岩出市農業士会現地研修会の開催

岩出農業士会（会長：吉村学氏 会員14名）では、令和6年2月1日に西牟婁郡白浜町において現地研修会を開催しました。

研修先は白浜町の榊四つ葉農園で、代表の濱野孝人さんに直接話をうかがい、意見交換することが出来ました。濱野さんは農業外からの参入で、現在白浜町で野菜の生産・販売で法人化して経営しています。

農業は、ライバルが少なく、有望と考え参入した。当初から良い人材を確保するためには法人化が必要と考えていたとのこと。今後は和歌山だけでなく県外でも事業を展開していく予定です。

会員の中には法人化を検討している者もあり、今回の研修は自分達の規模に近く、身近に感じられたものと思われま

す。その後、紀南地方のうめの加工施設を見学して研修を終えました。



（株）四つ葉農園での懇談



うめの加工施設を見学

2. 那賀地方農業士会の県外視察の開催

那賀地方農業士協議会（会長：山本佳彦氏）では令和6年2月20日（火）に県外研修会を開催しました。

今回の研修会は、我々農家が生産した農産物の利用状況を調査するため京都府内の外食、中食産業のセントラルキッチンを見学しました。

見学を前に施設の説明を受け、衛生面での対策をした後加工施設内を見学しました。調理作業を間近で見ることができ、衛生面への十分な配慮がなされていることを感じました。同じ食品を扱う我々も同様な気配りが必要であると



食品の加工施設を見学

思われました。

昼食後は京都府下で一番の規模という農産物直売所を見学しましたが、地元には規模の大きい「めっけもん広場」があり、これと比べると見劣りするとの意見がありました。



地元の直売所を見学

3. 紀の川市産業まつりへの参加

昨年度から紀の川市では「紀の川市産業まつり」が再開され、今年も紀の川市農業士会（会長：山本佳彦氏）が農産物販売で参画しました。

昨年と同様に、会員が生産したシクラメンの鉢物やスプレーギク等の切り花を販売しました。昨年も大好評であったみかんの詰め放題販売を今年は柿も含めて実施し、この日一番の盛況となりました。

この一日は消費者と直接ふれあえる機会であり、会員には貴重な体験となったものと思われま



盛況のみかんの詰め放題販売

農業士会支部活動レポート

REPORT

伊都地方農業士連絡協議会の取組

伊都地方農業士連絡協議会事務局

1. 県外研修会の開催

令和6年2月8日、獣害対策を目的とした県外研修を開催し、会員10名及び振興局担当者が出席しました。丹波篠山市の畑地区では、地域ぐるみで獣害対策に取り組まれており、防護や捕獲のリアルな現場を見学しました。

特定営利活動法人里地里山問題研修所の代表理事・鈴木克哉氏から、地域全体の獣害対策についての説明を聞きました。その後、畑地区の自治会長である岡本常博氏の紹介で現地を回り、集落全体を囲む防護柵やICT大型捕獲檻の設置状況等を見学しました。会員からは、防護柵の設置方法や設置後の見回り、修繕方法など様々な質問が行われました。

鈴木代表理事からは、獣害対策をきっかけに地域が元気になることを目指している、取り組みには地域で中心になる指導者が必要だが、地域にいなければ外から呼んで来ればよいとの説明があり、会員からは和歌山にも鈴木代表理事に来て欲しいとの声があがりました。



鈴木克哉代表理事の説明



現地視察の様子（防護柵）



大型捕獲罠の説明

2. 令和6年度伊都地方農業士連絡協議会総会、研修会の開催

令和6年4月16日、JA紀北かわかみかつらぎ支店において、伊都地方農業士連絡協議会総会及び研修会を開催しました。

総会に先立ち、来賓挨拶に続き、定年解除になった農業士への記念品贈呈、また新たに認定された農業士への認定証交付を行い、それぞれ今後の抱負を述べて頂きました。



定年解除者への祝辞



農業士認定証交付

総会では、中阪かつらぎ町長、宮本JA紀北かわかみ代表理事組合長ら来賓6名及び会員17名出席の下、全ての議題が原案どおり承認されました。



総会の様子

研修会では、和歌山県農業共済組合北部支所の松本課長を講師に招き、収入保険制度のしくみ、メリットなどについて、分かりやすく説明して頂きました。近年、被害規模の大きい自然災害が多くなっているため、会員らはいざというときの備えとして熱心に聞き入っていました。



研修会の様子

農業士会支部活動レポート

REPORT

令和6年度有田地方農業士協議会の活動について

有田地方農業士協議会事務局

有田地方農業士協議会(会長：武内啓和氏)では、生産技術の向上と農業経営の発展等を目指し、これからの地域農業の振興、活力ある産地づくり、自己研鑽等を中心に情報収集や意見交換等を行う場として講演会や研修会開催しています。

1. みかん栽培におけるドローン散布、水分管理、病害虫防除の研修会

令和6年4月16日、鮎茶屋で開催した有田地方農業士協議会総会時に、各市町の農業士と関係者の計43名が出席し研修会を行いました。そこで、有田地方4Hクラブの小川氏より「柑橘栽培におけるドローン防除の可能性」についてご講演いただき、今後の生産者減少の課題に対し、実証試験を通じ、時間や労力を削減するメリットと農薬ドリフトやバッテリー寿命のリスクに関して情報提供していただきました。



研修会 4Hクラブ小川氏の講演

また、県果樹試験場の中地氏、直川氏、下村氏より「温州ミカンの水分管理、黒点病の防除対策、カイガラムシ類の防除対策」の3題についてご講演いただき、葉の重要性や病害虫防除のポイントを学びました。参加した方々は熱心に聞き入り、講演後や研修会終了後も質問が絶えませんでした。また、もっとカンキツ栽培や病害虫防除について学びたいとの意見が挙がりました。

2. 援農対策、除草剤の省力化技術、S.マルチ、極晩生品種「おおさん」の研修会

令和6年8月19日、令和6年度有田地方農業士協議会・有田地方4Hクラブ連絡協議会(会長：栗山陽一朗氏)主催の合同研修会を湯浅町内において開催しました。毎年、各市町農業士会・4Hクラブの持ち回りで実施しており、各市町の農業士、4Hクラブおよび関係者の計55名が参加しました。この研修会では、室内と現地の2部構成で開催しました。

はじめに、室内研修(振興局大会議室)として、海南市下津町からFROM FARMの大谷氏を招き「援農への取り組み」として、2007年にUターン後2014年から農産物加工品の製造販売、蜜柑援農、カフェ経営等の産地活性に関して、ご講演いただきました。

次いで、(株)日産化学の多留氏、東氏からは、「ラウンドアップの省力化技術」として、電動の動力噴霧器を使い、実演しながら説明していただきました。その他、農業共済組合の植西氏から「収入保険」、間佐古

普及指導員から「クビアカツヤカミキリの防除対策」、「有田のみかん産地の再編整備」に関する案内や紹介がありました。

参加者の方々からは、援農者の取り組みにおいて当初始めた頃と近年の変化、ラウンドアップの有効な処理方法、収入保険の仕組み、クビアカツヤカミキリに対する有効な防除対策等の質問がありました。

その後、現地研修のため、湯浅町内にある現地圃場に移動しました。

現地研修では、「シールディングマルチ（S.マルチ）で温州みかんの高品質生産」に取り組む武内園と極晩生温州みかん「あおさん」を育成した湯川園を見学しました。

参加者の方々からは、シールディングマルチの設置に係る費用や手間、設置後の水管理の実施方法に関する質問があり、「あおさん」では、収穫時期が非常に遅いので、隔年結果への対応や有効な鳥害対策等について質問がありました。



○FROM FARM 大谷氏

- ・2014年：FROM FARM設立
県内の果物や山椒等を用いたオリジナル商品を開発販売
- ・蜜柑援農：農家と若者を繋げ、農業に興味を持つ若者の入口作り
- ・2019年：カフェ「Kamogo」オープン
10年以上使っていなかったJA支所を改装し、地域を盛り上げる拠点



○シールディングマルチ 武内園

- ・農研機構が開発したシールディングマルチ（S.マルチ）を早期から取り入れた実証園
- ・写真中央：S.シート（ポリエチレン製）
- ・糖度14.1（2023年JAありだ調べ）
- ・当県で開催される2025年全国カンキツ大会の視察園



○極晩生品種「あおさん」 湯川園

- ・2024年3月に新品種として登録
- ・「興津早生」の一樹変異個体
- ・湯川さんの屋号「青三」から命名
- ・写真中央：育成者 湯川氏
- ・特徴：浮き皮が少なく、果皮やじょうのう膜が薄く良食味

農業士会支部活動レポート

REPORT

令和6年度日高地方農業士会活動

日高地方農業士会事務局

1. 日高地方農業士会総代会

総代会を4月14日に日高振興局別館で開催しました。議事に入る前に、令和5年度新規認定農業士の紹介を行い、認定を更新した方を除いて新たに5名が入会となりました。

総代会終了後、話題提供として農業水産振興課の各担当から「経営継承応援資金」、「強い経営体育成支援事業」などの県単事業、令和6年度から新たにに取り組む普及指導計画の概要について説明を行い、出席者からは、補助対象機器や申請期限など、補助事業の活用に向けた質問のほか、補助対象の拡大や要件緩和の要望なども出されました。



新規認定者の紹介



清水会長の挨拶

2. 花育活動

日高地方花き連合会（会長：假家 誠氏）と共催で、日高地域の小学校を対象とした花育活動を5月17日に実施しました。この活動は、子どもたちに全国有数の花き産地である当地方の花の魅力や生産を知ってもらうことを目的に実施しており、今年度で16回目となります。

管内の生産者から提供された花で作成した花束と、日高地方の花を紹介したパンフレットを管内の小学校・特別支援学校28校の5・6年生（71クラス、1,062名）に届けました。

また、希望のあった9校では贈呈式を行い、うち5校では花き連合会員や農業士会員指導のもとミニ花束作り体験を実施し、体験をした児童は「お母さんにあげる」などと笑顔で話していました。



ミニ花束作り体験と記念撮影(川辺西小学校)

3. 女性部会先進地研修

日高地方農業士会女性部会（部長：片山綾子氏）が、女性農業士相互の研さんと親睦を図るため先進地研修を7月30日に実施し、三重県伊賀市にある「モクモクづくりファーム」で施設見学や、農村レストランでの昼食後、ポイルウイナーづくり体験を行いました。

材料を練り、羊の腸に実際に詰めて成形、茹でて完成となりますが、初体験の会員がほとんどで、楽しく和気あいあいとウイナーづくりを行いました。研修会中は、会員相互で意見交換を活発に行い、会員からは「これからも互いの交流と情報交換を活発に行いたい」との意見が聞かれました。



ウイナーづくり体験

4. 各市町農業士会活動



由良町農業士会 夏季研修会（8月）
除草剤の高濃度散布等について研修しました



日高川町農業士会 視察研修（7月）
兵庫県の農業法人、直売所等を訪ねました



美浜町農業士会 視察研修（7月）
県農業試験場で、水稻の高温耐性品種や施設野菜の天敵利用等について研修しました



印南町農業士会 視察研修（7月）
県果樹試験場で、E-cat（電動ねこ車）の体験や果樹カメムシ類の生態等について研修しました

農業士会支部活動レポート

REPORT

会員の研鑽と交流を深める活動の実施

西牟婁地方農業士会連絡協議会事務局

1. 西牟婁地方農業士会連絡協議会総会・研修会の開催

4月18日、当協議会（会長：家高 勇氏）は、紀南文化会館において、会員及び行政関係者等約50名が出席のもと、総会並びに研修会を開催しました。

総会では、令和5年度事業報告、収支決算報告及び令和6年度事業計画（案）、収支予算（案）ともに原案のとおり承認されました。

研修会は、3月末に定年となった指導農業士の谷口文治氏から、これまで取り組んできた自身の農業経営の紹介を交えた退任の挨拶がありました。

また、うめ研究所の綱木研究員から「開花前の温度条件がウメ花器および結実に及ぼす影響」について、裏垣研究員から「クビアカツヤカミキリの生態と被害状況」についての講演がありました。

会員からは、「温暖化でも不完全花を少なくするにはどうしたらよいか」や「クビアカツヤカミキリはどの様な木につきやすいのか」等の質問があり、熱心に聴き入っていました。



総会（家高会長挨拶）



研修会（講師：裏垣研究員）

2. 西牟婁地方農業士会連絡協議会女性部会が県内外で出前授業を実施

当女性部会（部会長：武森直子氏）は、田辺市立会津小学校において、4年生57名を対象に、11月18日は梅、11月20日はみかんの出前授業を実施しました。

梅の出前授業は、山添踊香氏と左向益美氏が、梅の産地や品種のこと、年間の梅畑の様子や梅干しができるまでの作業等について説明し、梅干しをプレゼントしました。

また、この出前授業は、西牟婁地方4Hクラブ連絡協議会の協力もあり、小谷将之氏と山崎昴幸氏が「うめラッシー」（梅シロップの牛乳割り）を紹介しました。

みかんの出前授業は、平田秀美氏と蕨良子氏が、みかんの産地や柑橘の種類について、園地での作業から出荷・流通について説明し、「おいしいみかんの見分け方」や「和歌山むき」を紹介した。またみかんのプレゼントも行いました。

いずれの出前授業においても、児童たちは興味深く話を聞き、質問もたくさん出ました。会津小学校では、今回学習したことなどをもとに、地域の特産品についてとりまとめ、JR紀伊田辺駅等で画像紹介する予定です。

また11月26日、大阪府立堺聴覚支援学校小学部の3年生から6年生19名及び教員10名を対象に、武森直子部会長、松場裕香氏および竹本京子氏が、和歌山の梅のPRのための出前授業を実施しました。「梅の一年」の話、冷凍梅と氷砂糖を使った梅シロップづくり体験の指導、梅おにぎりの試食や梅ジュースの試飲、梅干しや梅料理レシピの配布を行いました。児童たちは、手話通訳を通じて部会員の説明を熱心に聴き、梅シロップづくりを楽しみ、最後に意見や感想を発表してくれました。

今年度、出前授業の担当を部会員で分担し、小学生も直にふれ合うことで、手ごたえのある出前授業を3回実施できました。



うめ出前授業



みかん出前授業



梅シロップ作り体験

農業士会支部活動レポート

REPORT

東牟婁地方農業士会の活動について

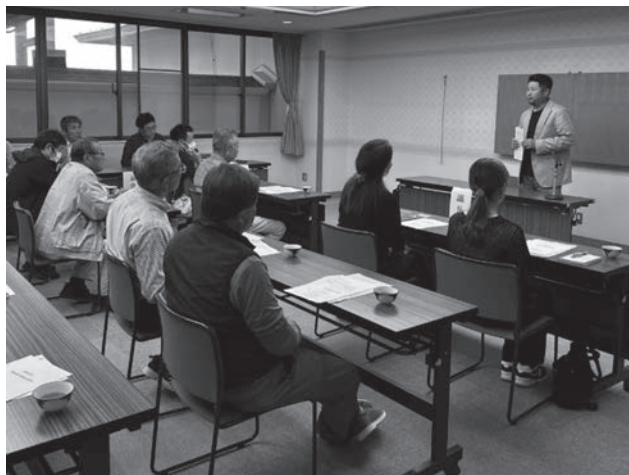
東牟婁地方農業士会事務局

1. 総会及び農業士認定式を開催

4月24日、東牟婁地方農業士会（会長：杉浦 仁氏）は、休暇村南紀勝浦において会員及び東牟婁振興局職員17名が出席のもと総会を開催しました。開会にあたり、杉浦会長からは、ここ数年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、農業士会の活動を控えていましたが、久しぶりの総会を開催できて、非常にうれしいと挨拶がありました。東牟婁振興局農林水産振興部の伊藤副部長の祝辞の後、令和5年度の活動報告、会計報告、新年度の活動計画などの議案はすべて可決されました。

総会終了後は、東牟婁振興局農業水産振興課の村畑主任から「経営継承応援資金」、「和歌山県青年リーダー育成支援事業」など県施策について話題提供が行われました。

また、農業士認定式では新たに認定された指導農業士2名、地域農業士1名に対し、伊藤副部長から認定書が授与されました。



杉浦会長挨拶



農業士認定式

2. 農業機械安全研修を開催

9月17日、農業水産振興課は農作業現場の機械事故防止を目的として、那智勝浦町南大居においてトラクターを用いた農業機械安全研修を開催しました。当日は、新規就農者、JAみくまの農業女子や関係者の7名が参加しました。

地域農業士の松本安弘氏が講師となり、受講者にトラクターの機械操作、機能、危険箇所や危険事項等の安全使用について説明しました。

その後、受講者は松本氏による指導の下、安全ヘルメット着用の上、トラクターを操作し、秋冬野菜予定地の耕運を行いました。受講者は、不慣れな機械操作に苦戦しながらも、トラクターを操作し、次第に機械操作が上達していました。

受講者からは、「緊急時に機械を止める方法や機械のメンテナンスはどうするのか」など多くの質問がありました。各質問に対し、松本氏は実例を挙げて解説しました。



松本氏の説明を受ける受講生



トラクターを操作する受講生

3. 農産物即売会を開催

11月30日、東牟婁地方農業士会（会長：杉浦 仁氏）と東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会（会長：安田裕志氏）は、那智勝浦町文化体育会館で行われた第46回那智勝浦町農産物品評会の開催に合わせて、農産物即売会を開催しました。

品評会では、那智勝浦町の農業士をはじめ多くの農業者から農産物106点が出展されました。

天候にも恵まれ、会場のテントには多くの人たちが訪れ、だいこん、キャベツ、しょうが、さつまいも、ほうじ茶など会員が生産した新鮮な農産物や加工品の売れ行きは好評でした。



農産物即売会



農産物品評会

地域の逸品!!

柿の新たな加工品「さくさく 柿せんべい」

紹介者

紀の川市 地域農業士

山田和美

1. 商品の紹介

作った果実を一つでもムダにしたい気持ちで始めた加工品づくり。過去に多数の果実の加工品を作出している稲垣明美さんが新たな柿の加工品を開発しました。

食べれば名前のとおり“さくさく”とした食感と柿の風味が広がります。柿の新たな食べ方発見です。少し黒いのは紀ノ川柿で他とは違う味と食感がアクセントに。

昨年の紀の川市産業まつりでも好評でよく売れていました。



2. お問い合わせ先等

販売は

貴志駅前 「紀の川フルーツ観光局」

粉河寺門前 「観光特産センター こかわ」

道の駅 「青州の里」

京奈和自動車道 「かつらぎ西PA」

価格：280円／袋前後(容量による、R6.12 現在)

地域の逸品!!

こだわりのハウス「せとか」

紹介者

有田川町 地域農業士

矢船直人

有田川町は温州みかんをはじめとした柑橘類の栽培が盛んです。私の園では温州みかんを主に栽培していますが、労力分散などを考慮し、7aのハウスで年末に収穫できる「せとか」を栽培しています。導入のきっかけは、ハウスみかんとして栽培していた上野早生の品質が悪く、何か新しいものを始めてみたいと思っていたところ、愛媛県を視察した際に評価の高かった「せとか」を作ることになりました。2008年に初出荷し、当時は7戸ほどの生産者がいましたが、現在では加温ハウスで年末に収穫する生産者は私のみとなってしまいました。今回は、こだわりを持って栽培に取り組むハウス「せとか」を紹介します。

1. 商品の紹介

ハウス「せとか」は、年末に収穫し、少し置いた後、年明けから1月中旬まで出荷しています。果実は、玉張りが良く400g程度になります。また、温州みかんなどとは異なる香りも特徴的です。

〈こだわりの点〉

- ①ハウスの加温開始は2月1日ごろに行っています。加温開始がそれより早くなると収穫期にクラッキングを生じたり、遅くなると腰高の果実となるため、試行錯誤を繰り返し、適期を見つけました。
- ②「せとか」は日焼けが多いので外成りの果実を中心にサンテをかけています。これまでは着色期に外していましたが、収穫時までかけておくと外観が非常にきれいに仕上がります。
- ③夏場はハウスのビニールの一部を外しますが、10月下旬に再びビニールをすべて閉じます。温度を高くすることで、肥大と減酸が進みます。



たわわに実った「せとか」



サンテによる外観の向上

J AのA Q選果場へ出荷しており、京阪神や首都圏で販売されています。残念ながら地元ではほとんど流通しませんが、J Aの直売所などで見かけた際はご賞味ください。

地域の逸品!!

「ブラッドオレンジジュース」

紹介者

田辺市 青年農業士

野久保 光 祐

田辺市上秋津地区は、山の斜面に温州みかんをはじめ多種多様な柑橘類が栽培されており、平地の水田転換園には梅やすももなどの落葉果樹が栽培されています。古くから、みかんの銘柄産地として市場の評価も高く、全国的にみかん園の転換が進む中において、優良新品種を導入しながら、いまなお柑橘栽培を積極的に展開する果樹農業の活発な地区です。

1. 商品の紹介

ブラッドオレンジはイタリアやスペインなどの温暖な地中海沿岸が原産地で、その特徴は、何と云ってもインパクトのある鮮やかな赤い果肉。コクのある濃厚な甘さとすっきりとした酸味、そして芳醇な香りがあります。

ブラッドオレンジの甘みを増すため日当たりの良い畑で栽培しており、搾汁する際には手作業で果皮にある不純物を取り除いています。

田辺市の温暖な気候で成熟した果実のみを使用し、ブラッドオレンジの爽やかな香りと甘みをお楽しみください。

2. お問い合わせ先等

まるの農園 代表 野久保光祐

<https://www.maruno-nouen.com>

田辺市上秋津3316-1 (電話) 0739-35-0234



ブラッドオレンジジュース (700ml入り)



3本入りセット

県からのお知らせ

農業士認定事業について

県農林水産業のリーダーを認定

和歌山県農林水産部経営支援課

2月3日、和歌山県農業士・林業士・漁業士認定式を開催し、県農林水産業の中核的な担い手で、地域のリーダーとして活動している方々を、農業士、林業士、漁業士として認定しました。今回の認定により、県内の農業士は717名となりました。

また、認定に先立ち、農林漁業各分野で長年にわたり活躍された方々の功績に敬意を表して知事感謝状を贈呈しました。

今回、感謝状を受け取られた皆様、農業士の認定を受けられた皆様は次のとおりです（敬称略）。

感謝状を受けられた皆様 25名

氏名	市町村
吉田 謙二	和歌山市
河島 康典	和歌山市
馬場 伸之	海南市
宮尾 修司	海南市
稲垣 明美	紀の川市
土田 耕司	紀の川市
岩鶴 啓司	紀の川市
山田 真司	紀の川市
西 嘉彦	橋本市
山本 武美	かつらぎ町
田中 里美	橋本市
山本 清晶	有田川町
南村 昌己	有田市

氏名	市町村
西岡 邦和	広川町
西岡 紀雄	広川町
川瀬 顕作	湯浅町
大嶋 徳男	日高川町
山田 裕司	御坊市
森本 智行	印南町
芦 裕真弓	みなべ町
坂本 増巳	田辺市
山下 優	田辺市
道阪 耕一	新宮市
塩崎 一男	那智勝浦町
谷本 昌平	串本町



県からのお知らせ

指導農業士認定者 12名

氏名	市町村
山本達弥	和歌山市
高岡寛行	和歌山市
貴志年伸	和歌山市
藪下直樹	紀の川市
武内啓和	易浅浅町
蔵本定宏	広川町

氏名	市町村
富上典昭	広川町
瀧本和伸	有田川町
楠本泰規	御坊市
原出幸典	御坊市
小谷真一	田辺市
谷本雅司	上富田町

地域農業士認定者 22名

氏名	市町村
増田正民	和歌山市
松本一輝	和歌山市
井口智晴	和歌山市
泉博之	和歌山市
栩野雄平	和歌山市
風呂谷康嗣	紀の川市
前田治樹	橋本市
松本聖	有田市
栗山卓大	広川町
谷畑翔	有田川町
高垣秀章	有田川町

氏名	市町村
山下広太郎	有田川町
猪谷浩司	有田川町
黒田誠司	御坊市
小阪英誉	御坊市
西政俊	日高町
上裕秀規	みなべ町
鈴木昌子	田辺市
栗山修一	田辺市
畑下由美	那智勝浦町
小濱吉包	那智勝浦町
南条紀子	串本町

青年農業士認定者 9名

氏名	市町村
北廣絢也	和歌山市
和田祐樹	和歌山市
山本康平	和歌山市
奥野友太	和歌山市
西谷友希	広川町

氏名	市町村
山野晋矢	御坊市
垣内利彌	田辺市
坂本喬	田辺市
松下達郎	田辺市



(参考) 農業士について

昭和 51 年から県知事が認定している制度。

地域農業の振興と農村の活性化にリーダー的役割を果たしている農業者に対し、付与される称号。「指導農業士 (65 歳まで)」、「地域農業士 (65 歳まで)」、「青年農業士 (40 歳まで)」の3つの区分がある。

令和 7 年 2 月現在の認定者数は以下の通り。

指導農業士	105 名(うち女性	14名)
地域農業士	533 名(うち女性	56名)
青年農業士	79 名	
合 計	717 名(うち女性	70名)



表紙の人

かつらぎ町 指導農業士

辻 重光さん

辻さんは平核無135a、ハウス柿10a、みかん30a、すもも10a、農産物加工(あんぼ柿)などを手がけるとともに、機械化の推進や農機具店勤務の経験を活かして農機具の修理を自身でこなしています。

また、伊都地方農業士連絡協議会会長やJA運営委員を務めるなど、地域農業の発展に貢献されています。

和歌山の農業士 第 24号

発行日：令和 7 年 3 月

編 集：和歌山県

和歌山県農業士会連絡協議会

印 刷：有限会社 隆文社印刷所



和歌山の 農業士

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

